

せせらぎ



発行：JCHO 三島総合病院地域連携室
発行責任者：病院長 野田 芳人

JCHO 三島総合病院
TEL：055-975-3031

静岡

DMAT

Japan Disaster Medical Assistance Team



日本DMAT隊員
三島総合病院 外科医師
関 亮太

熱海市土砂災害への三島総合病院DMATの派遣について(活動報告)

この度の熱海市土砂災害において犠牲になられた方々にお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。三島総合病院は県から派遣要請があり、被災地へDMAT(災害医療支援チーム)を派遣いたしました。被災地での活動について、ご報告させていただきます。

【活動場所】

- ・熱海保健所 (活動拠点本部→保健医療福祉合同調整本部)
- ・避難所

【派遣メンバー】

医師1名、看護師2名、業務調整員1名の計4名

【主な活動内容】

- ・活動拠点本部における情報収集、連絡等
- ・避難所(ニューフジャホテル)での視察・救護活動



静岡県からの要請に基づき、7月9日、7時に当院DMATが被災地へ向けて出発しました。

熱海市保健所内の活動拠点本部に8時到着。本部には伊東市民病院の宇津木先生、島田市立総合医療センターの松岡先生のほか、当院を含む5隊が参集していました。当日は二回土砂崩れが発生したとの情報が入っており、現場への派遣は見合わせとなっていました。DMATの業務としては、救助者の生死確認、支援者の健康チェックということでした。現場で救助活動に参加している警察や消防隊員は劣悪な環境下での活動が続いておりかなり疲弊していて、気温の上昇に伴う熱中症や救助活動中の外傷が問題となっていました。

我々の隊は本部の指揮のもと、避難所支援に向かうことになりました。ミッションは、①避難所を統括している県の保健師さんとの連携・情報共有 ②避難所内の感染対策 ③被災者の健康チェックでした。

①**保健師さんとの連携**に関しては、医師から保健師さんに直接依頼などをするのではなく、当院の紅林看護師をリエゾン(災害対策現地情報連絡員)として本部、DMAT、保健師さんとのパイプ役になってもらいました。

②**感染対策**については、到着後保健師さんからの最初の依頼であり喫緊の課題でした。

避難所はホテルであったので、ロビーには被災者に限らず人があふれ密な状態でした。食事に関しては、バイキング形式で酒類も提供されており、カラオケや麻雀も使用できる状態でした。

酒類に関しては部屋でのみ許可し、カラオケや麻雀は禁止、ラウンジで会話しながらの食事も禁止としました。

③**健康チェック**に関しては、保健師さんとDMATがそれぞれフォローしている状態でありDMATだけしか把握できていない方がいることが問題でした。それに関しては、保健師さんとペアで訪問し、情報共有の場を設けるとともに地元医師会の協力も仰いで問題を解決していく体制を構築しました。同時に入所者の要支援リストの作成、更新を行い、診療録がない中での情報共有ツールとしました。実際に各部屋を訪問してみると、持病の悪化が危惧される方や、高齢で足腰が悪く、かかりつけの医院へ薬を取りに行けない方、内服の自己管理ができず訪問看護が途切れて処置が必要な方など医療ニーズもそれなりにある状態でした。

また、長い避難生活で精神的に不安定となる方が多数発生しており、DPAT(災害派遣精神医療チーム)やDWAT(災害派遣福祉チーム)のニーズが高まっている状態でした。

16時に全体ミーティングにて引継ぎを行い避難所から撤収、本部にてZoom会議に参加し活動終了となり、19時頃に帰院しました。

災害支援活動を振り返って

医療者から見て困っていそうなことと、そこに暮らす人が困っていることは必ずしも一致しません。地域によって考え方も違います。地元の保健、医療、介護関係者との連携が不可欠であり、ただ医療を提供するのではなく、求められている事へ柔軟に対応する姿勢を持たなければならないと痛感しました。

今回の熱海土砂災害の被害を受けられた方々に対して引き続きの支援を行ってまいりたいと考えております。

